

2017 JUA/EAU Resident Programme 参加報告

福原 宏樹 (山形大)

この度、2017年3月24日～28日までイギリスのロンドンで行われた第32回欧州泌尿器科学会 (EAU) に JUA/EAU Resident Programme の一員として参加する機会を頂きました。EAUのトピックスをまとめた雑誌が本邦から毎年刊行されているのですが、いずれも臨床に直結する興味深い内容ばかりです。私はこうした質の高い研究を多く発信するEAUに参加したいと以前から考えておりました。この度JUA/EAU Resident Programmeを通してEAUに参加することができ非常に嬉しく思っております。

イギリスの天気は非常に変わりやすいと聞いていましたが幸い学会期間中は天候に恵まれ非常に過ごしやすかったです。ヒースロー空港から学会会場へ向かう途中に車窓から見えた桜は満開～散りはじめの時期であり日本よりも暖かい気候であることが感じられました。

Resident Programmeの一環として学会初日に行われたJUA/EAU Joint Session 及び Opening ceremony, 2日目に開催されたResident Dinnerへ参加しました。JUA/EAU Joint Sessionでは日本と欧州の著明な先生方が双方の立場で議論を繰り広げておりました。特に転移性腎細胞癌に対する2nd lineの治療としてNivolumabを使用するかAxitinibを使用するかどうかについて白熱した議論がなされており双方の立場を深く理解することができました。Opening ceremonyでは聖歌隊の入場から始まり、EAUで長年ご活躍された先生方の素晴らしいスピーチを興味深く拝聴しました。Resident Dinnerでは日常生活から研究内容まで多くのことを語りあうことができ、海外の同世代の医療に対する考え方や研究の姿勢を学ぶことができました。

また一般のセッションでは膀胱癌、前立腺癌を中心に聴講しました。膀胱癌に関しては術後回復強化プログラム (ERAS) の演題が多くあり、ERASの有無によって5～10日程度入院期間が短縮できるとのことでした。施設によってERASのプロトコルに違いはありますが積極的に取り入れていくべきものと感じました。High grade T1は非常に診断が難しく病理所見が極めて重要であることを学びました。膀胱全摘術におけるリンパ節郭清の範囲は未だ確立しておらず今後の重要な検討課題であると感じました。さらに転移性膀胱癌に関する免疫療法の治療成績、現在行われている臨床試験を体系的に把握することができ非常に勉強になりました。前立腺癌に関しては前立腺生検前のMRIの重要性が強調されておりました。MRI陰性の前立腺癌も存在するため初回の前立腺生検はtarget biopsyではなく系統的な前立腺生検の方が望ましいと感じました。またGleason score 3+



4=7のwatchful waitingが許容されるかどうかディベート形式で行われており非常に興味深いセッションでした。Gleason score 3+4=7でも非常に進行が遅い症例を経験することがあり、症例を選べばwatchful waitingも許容されると感じました。学会最終日のESU courseでは腎移植を中心に聴講しました。腎移植のうち21%が生体腎移植であること、ドナーの腎摘出のうち24%がロボットを使用していること等日本と異なる点が多くあり勉強になりました。

海外の学会に参加すると毎回思うことなのですが、質疑応答のレベルが日本と比べて随分高いと感じました。自分と同年代の発表者も多くいましたがいずれの発表者もエビデンスを交えながら堂々と質問に答えておりました。

た。自分も彼らを見習い積極的なディスカッションを展開するように心がけなければと思いました。

学会期間中は東京大学の内藤晶裕先生、岩手県立磐井病院の木村信吾先生と一緒にさせていただきました。同学年ということもあり、日常の何気ない会話から興味のある分野や将来について多く語ることができました。日常臨床や学会を通しては知り合うことができない仲間が

できたことは自分にとって非常に大きな収穫であったと感じております。

今回、このような素晴らしい機会を提供して下さった日本泌尿器科学会理事長 藤澤正人先生、国際委員長 穎川晋先生、JUA/EAU Resident Programme に私を推薦して下さった土谷順彦先生に感謝申し上げます。この経験を活かし今後の診療に役立てていきたいと思ひます。